
天使の歌声

りみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の歌声

【Nコード】

N4120A

【作者名】

りみ

【あらすじ】

実母に殺されかけ、施設では邪険にされ、心を閉ざしオドオドしてきた少女・亜香。そんな少女の持ち前の“天使の歌声”により、ピアニストと運命の出会いをする。切なくもどかしい純愛小説・・・

第一話 天使の歌声を持つ少女

《第一話 天使の歌声を持つ少女》

東京都内の某施設。

ここには、18歳未満の“孤児”がたくさん暮らしてる。

302号室。

「おい、食事だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まったく、気味が悪い」

【ガタンッ！！】

荒々しく扉を閉めてから、無情な職員は去って行く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は、食事に少し手をつけただけで、後はパンと牛乳を持ってどこかへ去っていく。

この少女の名は みやざき 宮崎 あか 亜香。誰も誕生日を知らないし、亜香自身も自分の誕生日を知らない。

整った可愛い顔立ちなのに、その顔はいつも曇っていて、キレイな瞳はいつも曇っている。

名前は、一応母親がつけた。母親は、亜香が4歳にまでは一緒にい

た。といつても・・・いないほうがよかったのかも知れない。
5歳のときに捨てられて、10年経つから、亜香は15歳だ。
親は当然いない。・・・いたのだけど・・・捨てられた・・・。
髪型はセミロング。あんまり長いと“あのこと”を思い出すから、
伸びてくると自分で切っちゃう。

思い出したくも無い過去 首にある青いアザ
亜香自身がすごく苦しくて。もう、人間から逃げたくて.....。

【ガラリー・・・】

「！ニャアアンツ！！」

「.....ほら、食事だよ.....」

亜香の心の支えは“ネコ”。誰もいることを知らない。

亜香は“愛”を知らない。“人間”を信じられない。

愛がどんなものか分からないから、人間とどう接していいかも分からない。

だから、人間に嫌われる。だからますます.....人間不信になる。
“笑い”“微笑み”を知らない。だから人前で笑えない。

【~~~~~】

「!.....今日も.....聞こえた.....」
隣の音楽会館から、

とたんに嬉しそうな顔。けど、亜香はこの顔が“笑顔”だと言う事をわかっていない。亜香は笑っているけど、自分が笑っていることをわかってない。

「……………あ、“空色の国”だ……………」
「……………スウツ……………」

小さくて細い体に、めいっぱい空気を吸い込んで……………。

「この国はとてつもなく青いんだよ

なにもないよ　だからいいんだよ　か細い糸が　私達をつなぐ

周り見てごらん　真っ青だね　明るいよね

つまらない意地　捨ててごらんよ　ほら、キレイでしょう？

この虹を　一緒に渡ろう　さあ、向こうへ一緒に行こう

この国はとてつもなく青いんだよ　だからネコのように　気ままに

生きよう

青の国は空色の国　キレイで気ままに生きれる国

青の国は空色の国　みんなで一緒に暮らそうよ

青の国には　愛があふれてる

この国はとてつもなく青いんだよ　だからイヌのように　気ままに
生きよう

青の国は空色の国　キレイで澄み切ったあたしの心

青の国には　愛があふれてる……………」

「！あつ、天使の歌声！」

「ホントだ！これ、昨日も聞こえたよね？」

「ウンツ！なんか曲が昨日と違うよね？」

「・・・キレイな声だよね・・・、甘くて、優しくて・・・、きつと歌ってる人、美人なんだろうなあ・・・」

「こんなきれいな歌声が出せるのは、“天使”以外いないよぉ〜」

某音楽会館。

音楽を聴きに来た人々が噂する“天使の歌声”。あの施設の音楽室でしゃべった声は音楽会館に聞こえる。だからこそ、天使の歌声は聞こえてくる。

天使の歌声 亜香の声。

亜香には特別な才能がある。“即興作詞才能”。

亜香は“愛”の意味を知らない。“キレイ”の意味を知らない。“生きよ

う”の意味すらも知らない。

けど・・・、音楽を聴くと、自然に単語が浮かんでくる。それをメロディーにあわせて歌うと、自然と歌が出来てしまう。意識していなくても、メロディーを聴くだけで単語が頭に浮かぶ。だから、作詞ができる。

そして・・・、亜香は“天使の歌声”を持つてる。甘くて優しくどこか切ない声。一流の歌手でも齒が立たない。

「・・・フウ・・・、・・・ねえ、ネコちゃん？・・・“愛”って何だろうね？・・・頭に浮かぶの・・・

・でも、意味が分からないの・・・・・・・・、つつ・・・・・・・・!!!!」

【ドクンツ・・・・・・・・!!ドクンツ・・・・・・・・!!】

なぜかはわからないが、“愛”の意味を考えるたび胸が苦しくなり、

“あのこと”を思い出す。

苦しくてもどかしくて・・・・・・・・、死にたくなる。

“愛”の意味を分らず、少女は今日も暮らしていく。

でも、このとき神は、生まれてくる世界を間違えた“天使”を見つけ、“幸せ”を授けようとするのだ。

でも、“墮神^{だしん}”がそれを邪魔し、“天使”の羽をもごうとする。

天使は・・・・・・・・、幸せをもらえるのだろうか・・・・・・・・

第二話 神と天使

【~~~~~】

音楽会館ではピアノの音が鳴り止まない。

“特別音楽室” 今は誰も使ってない。“一人の男”を除いて。

たけなか
竹中 ゆうや 裕也 24歳の天才ピアニスト。

音楽会館の玄関には、大きいポスターに裕也の写真。そして、『天才ピアニスト、竹中裕也！！11月20日、リサイタル！！』という見出し。

愛の多い家庭に生まれ育ち、何不自由なく育ったお坊ちゃん。ピアノが生きがいで、ピアノの才能に恵まれてて、今じゃ“天才”と呼ばれ、この音楽会館に走らない人がいないほどの実力者。

裕也は優しくて温厚で慈悲深い性格で。それゆえにファンも多くて。

裕也は、ピアノの神 神なのだ。

【パチパチパチパチパチ……】

「！館長！」

「すばらしいね、裕也君」

「恐れ入ります」

館長は裕也が小さいときから可愛がってて、裕也も館長になつてた。

「……君のピアノの音は……、 “天使” も聞けるようだ。」

「え？」

「……聞いたんだ。 “天使の歌声” を」

「……天使の歌声……？」

「甘くて、柔らかい声なんだ……、本物の天使が歌っているか

のような・・・そんな声だったんだ。・・・それも、“君のピアノにだけ”あわせて歌っているんだ。・・・」

「・・・僕のピアノに・・・だけ？・・・ハハツ、それは光栄ですね。天使に歌っていただけるなんて。・・・なら、その天使に、一度会ってみたいものですね。・・・」

施設。

施設では相変わらず亜香は孤独で。
苦しくて寂しくて死にたくて。

「ねえ・・・、あの子、“亜香”って名前だったんだって！」

「へえー！あいつしやべらないからさ、いること自体しらなかったあゝ！」

「アハハッ！！！！いえてるう！！・・・“あか”なんて変わってるよね」

「“垢”だらけだからじゃなあゝい？」

「アハハハハ！！！！マジ言えてるうゝゝゝ！！！！」

亜香は誰にも相手にされない。いや、されないほうがいい。

《あんたみたいな子、産まなきゃよかった》

《あんたがあたしの幸せを奪ったんだよ！！》

《アアアアアア　　！！！！何もかもおしまいだ、お前のせいで！！！！・・・一緒に死んでよ・・・ねえ・・・死になさいよ・・・死ぬ　　！！！！》

(・・・っつ・・・！！！！やあつ・・・！！！！いやああつ・・・

・・！！！！）

言葉にならない叫びを上げる天使。

誰にも助けを聞いてもらえない孤独な天使。

過去の苦しみという鎖に囚われ逃げる事が出来ない天使。

“愛”を知りたいのに邪魔されて知ることが出来ない天使。

今日も天使は叫び声を上げている。

助けて、たすけて、タスケテ・・・・・・・・！！！！
怖い、こわい、コワイヨ・・・・・・・・！！！！
人間が怖い。愛が怖い。幸せが怖い・・・・・・・・！！！！

そんな天使の苦しみを、神は悟ったのだろうか。

「・・・・・・・・、ここか・・・・」

“神” 裕也は、施設にきていた。

“天使”に会うために・・・・・・・・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4120a/>

天使の歌声

2011年1月19日01時52分発行